ステンドグラス

終戦80年・慶應義塾と戦争（日吉キャンパス編）

前回（春号）の三田・信濃町両キャンパスに続き、今号では日吉キャンパスを取り上げる。戦争末期、日吉の校舎の一部は帝国海軍に接収され、地下には連合艦隊司令部などが建設された。そして敗戦後、今度は日本に進駐した米軍によっておよそ4年間にわたって接収される。キャンパスと戦争との関わり、そしてその痕跡である「日吉台地下壕」について紹介する。

竣工時の日吉キャンパス
（福澤研究センター提供）

田園都市構想に沿った「日吉キャンパス」誕生

昭和を迎えた頃、学生数の増加により慶應義塾では三田キャンパスが次第に手狭になり、1927（昭和2）年より新キャンパス開設を検討し始める。すると沿線の田園都市構想の一環として学校誘致による旅客需要増を目指す東京横浜電鉄株式会社（現・東急電鉄株式会社）から〝日吉台〟の土地約7万2000坪を無償提供するとの申し出があり、日吉キャンパスの開設が決まった。

1934（昭和9）年4月に大学予科の移転をもって日吉キャンパスの歴史が始まる。同年11月には福澤諭吉誕生100年を兼ね、日吉開校記念祝賀会が開催された。1939（昭和14）年には、工学部（現・理工学部）の前身である「藤原工業大学」が開校。同大学は1944（昭和19）年に慶應義塾に寄付された。

日吉開校記念祝賀会（福澤研究センター提供）

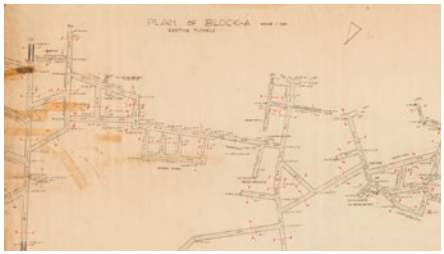
戦争に翻弄され続けた日吉キャンパスの歩み

しかし、その頃第2次世界大戦の戦況は悪化の一途をたどり、1943（昭和18）年10月には満20歳に達した文系学生の徴兵猶予が廃止され、終戦までの間、約3500名の塾生が学徒出陣により戦地に送られた。

また当時の文部省は校舎の貸与を慶應義塾に求め、日吉キャンパスでは1944（昭和19）年3月から第一校舎や寄宿舎などを海軍省に貸与することになった。日吉は地理的に霞が関（海軍省・軍令部）と横須賀（軍港）のほぼ中間に位置し、無線通信環境も良好。しかもキャンパスの寄宿舎は鉄筋コンクリートの堅固な建物で、個室も多く司令部機能はもちろん、居住環境としても最適と考えられたのだ。

まず海軍による寄宿舎の全面使用が始まり、同時期にキャンパス地下で軍事施設の建設が急ピッチで進んだ。建設された施設は軍令部第三部退避壕、連合艦隊司令部地下壕、航空本部等地下壕、人事局地下壕で、総延長距離は約2・6㎞に及ぶ。キ

【あの日、あの時、
映像でよみがえる慶應義塾】～
「VIRIBUS UNITIS 力を合せて
―慶應義塾復興記録 1947～1949―」



大学に残る最古の
地下壕の測量図
（福澤研究センター提供）

キャンパスの返
還式で手渡され
た木製の大鍵
（福澤研究セン
ター提供）

ャンパス外部には艦政本部地下壕も作られ、これらをまとめて「日吉台地下壕」と呼ぶ。

１９４５（昭和20）年４月、日吉キャンパスは空襲によって工学部校舎の約８割が焼失した。同年８月14日に日本は連合国軍に無条件降伏を決定。米軍が最初に日吉キャンパスに足を踏み入れたのは東京湾上の戦艦ミズーリで行われた降伏文書調印の２日後の９月４日と言われている。同８日には「日吉軍事占領の命令書」が渡され、米軍による日吉キャンパス接収が始まった。

接収直後から当時の渉外室や塾員有志の三田リエーゾンクラブによる米軍への度重なる返還交渉、さらに当時の学生新聞『三田新聞』でほぼ毎号キャンパス返還に関する特集記事が組まれた。こうした慶應義塾一丸となった返還への取り組みがようやく実を結び、１９４９（昭和24）年、米ソ対立による占領政策の転換を背景に、６月27日に接収解除が決定。同年10月１日の返還式では、返還のシンボルとして米軍より金色木製の〝大鍵〟が当時の潮田江次塾長に手渡された。

今も残る「日吉台地下壕」は平和への思いを巡らす拠点

戦後復興の中で、「日吉台地下壕」の存在は長く忘れ去られていた。まずその存在に注目したのは中高生たちだった。最も古い記録では１９５８（昭和33）年の慶應義塾普通部生徒が労作展の展示で取り上げ、11年後の１９６９（昭和44）年には慶應義塾高等学校の文化祭「日吉祭」で生徒有志が研究発表を行い、その成果は後に小冊子『わが足の下』にまとめられた。それによると「高校に入学して校舎の裏の谷に地下壕の入り口があるのを発見した。（中略）内部の様子を詳しく知るために、自分たちで地図を作りながら歩き回った」とある。生徒たちは入坑許可を得て内部を探索・測量するだけでは飽き足らず、当時を知る関係者への聞き取りも行っている。本格的な調査・研究が始まったのは80年代半ばのことだったが、当時最も有力な資料となったのは高校生の調査記録『わが足の下』だった。今世紀に入ると考古学による学術調査も始まり、戦争や平和について考える拠点として現在も研究が続けられている。

日吉キャンパスの地下に、80年前の戦争の痕跡「日吉台地下壕」が今も存在している。そのことから目を背けるのではなく、今から56年前に知的好奇心によって調査研究に取り組んだ中高生たちの営為は、まさに学びの原点と言える。塾生は、自分たちの「足の下」にも目を向けつつ、自由に学び、研究できることの意味を心に刻みながら、日々の活動に取り組んでもらいたい。

地下壕入口

現在の地下壕内作戦室跡。左は暗号室・電信室への通路